令和３年度島根県立農林大学校の取り組み

●教育の目的	●基本方針	●重点目標
「次代の島根県の農林業をリードする農業者及び林業技術者の養成」	・高度な農林業技術と専門的知識を習得し、経営管理能力を養う。 ・広い視野に立って農林業を考え、技術革新、経営改善に積極的に取り組み、新しい農林業を創造する能力を養う。 ・先見性を持って流動的な社会情勢に対応するための分析力、判断力、行動力を養う。 ・農林業生産及び農山村社会におけるリーダーとして必要な指導力、企画力、調整力を養う。	①意欲ある学生の確保 ②教育内容の充実・強化と実践力の養成 ③進路指導の充実と進路意識の高揚

１ 意欲ある学生の確保

(1) 取組概要

【入学者数の推移】

年度	農業科										林業科			合計
	２年課程						１年課程（短期養成）			計	２年課程	１年課程	計	
	有機農業	野菜	花き	果樹	肉用牛	小計	4月	10月	小計			早期養成(10月)		
H30	9	4	1	3	6	23				23	10		10	33
R1	7	9	4	3	7	30				30	11		11	41
R2	10	9	3	7	3	32	7	2	9	41	8	6	14	55
R3	8	9		5	9	31	14	5	19	50	16	3	19	69
R4	**13**	**4**		**12**	**7**	**36**	**12**		**12**	**48**	**13**		**13**	**61**

■令和２年度から、１年課程の農業科短期養成コース・林業科早期養成コースを新設し、２年課程と１年課程を併せた定員を、農業科は30名から45名に、林業科は10名から20名に増員した。

■オープンキャンパス、高校生の体験学習受入、県内・県外の高校訪問、高校進路ガイダンスへの参加、ＳＮＳ活用などの取り組みを行い、意欲ある学生の確保に努めた。

■Ｒ４年度入学者数は、農業科２年課程36名＋短期養成コース12名＝48名で定員を上回った。

■林業科は２年課程13名となった。

■Ｒ４年度入学者のうち、農業科２年課程では21名（58%）、短期養成コースでは全員が卒業後、自営就農又は雇用経由自営就農を目指している。

■林業科は全員が林業事業体への就業を目指している。

(2) 具体的取組状況

区分	前年度	今年度の取組状況	評価コメント（外部評価委員）
オープンキャンパス	4回 56名参加	■7月31日(土)、8月7日(土)、8月21日(土)、28日(土)、9月4日(土)の5回開催し、高校3年生53名、社会人等35名の計88名が参加。近年では最多の参加者となった。コロナ対策のため、地区別に開催し、各回毎の参加人数の平準化を図った。 ■隠岐地区入学希望者に対して、リモートによるオープンキャンパスを実施した。	・今年度の取り組み状況が記載され、詳しく様子を知ることが出来た。コロナ禍ではあるが、多くの教育活動の実施に敬意。 ・高校と農大は担い手育成という共通の使命を持ち連携していく必要性を強く感じる ・コロナ禍にあって、学生確保に向けての関係者のご努力に敬意を表する。 ・1年過程を新設したことで2年過程が減少することもなく、農業科は定員確保しており、基本的に目標達成と考える。 ・年度ごとの入学者のバラツキはたまたまなのか、或いはそれぞれに何か事情があるのか検証が必要。 ・オープンキャンパスの参加者の増加やリモートを取り入れた説明会等の工夫により成果が出ている。 ・農業高校との連携の取組も入学者増に結びついている。 ・定員増やオープンキャンパス、体験学習、SNS活用など積極的な取り組みにより、成果を上げている。 ・農業に興味を持つ高校生及び短期養成コースの入学者が増えとても喜ばしい。コロナ渦に於いて、都会からのＩターン者や地元に残る人たちも増えたのかなと思う。 ・コロナ禍で学生確保に向けたＰＲ活動も制限せざるを得ない中で、農業者の入学者が定員を上回ったことは評価に値する。 ・農大体験訪問研修での学習、実習、学校生活についての意見交換は大変有意義。 ・体験学習の受入は近隣の学校にもPRしてもらいたい。また、出前授業など出かけていく取り組みも教育関係機関と連携して行って欲しい。 ・具体的取組効果については、コロナの影響で十分できていない取り組みもあるが、継続して実施することが大切。 ・卒業後、就農する者や林業事業体へ就業するものが多くなっている状況であるため、安定した魅力的な職場の確保や自営就農希望の場合等の手厚い相談体制があれば良いと思う。 ・２年コースと１年コースの設定は入学者のニーズに応えられる良い設定。定員が満たしていない部分は要因を分析し、改善に努めて欲しい。 ・高校生に農大卒業生の成功事例を知ってもらう機会を設けると良い。 ・農業高校連携で高校３年＋大学校２年を通しての取り組みは、テーマを明確にしていけば効果が期待できる。
体験研修受入	12校 264名 参加	■延べ7校、257名の高校生の体験学習を受け入れた。農業科は、１年生の体験学習中心。 ■出雲農林高校植物科学科２年生は高校で取り組む「課題研究」について本校学生・教員との意見交換を行った。 ■林業科では、10校(延11校)241名を受け入れた(高校6校156名、中学校3校80名、小学校1校5名)。林業の仕事内容、林業科説明・ＰＲ、林業機械操作体験等を行った。	
県内高校訪問	3回	【第１回】6月　県内49高校、市町村、県農林振興センター等合計105機関を訪問 【第２回】9月　オープンキャンパス参加者高校を中心に24校を訪問 【第３回】12月　普通高校を中心に30校を訪問	
県外高校訪問・資料送付	4県 22校	■林業科学生募集を目的とした県外高校訪問は、コロナ禍のため、山口県立山口農業高校１校について実施 ■学校要覧・学生募集要項・林業科パンフレット等の資料を中国地方４県の高校343校(定時制・通信制を含む)、西日本(中国地方を除く)の森林コース設置高校10校に送付	
高校進路ガイダンス	12校 147名	■延べ12校、147名に、①島根県立農林大学校の魅力、②農業の魅力、③林業の魅力をＰＲ ■新たに、吉賀高校、隠岐島前高校から出席依頼があり対応 ■林業科へは、新たに山口県立山口農業高校から出席依頼があり対応した 1回目7/16：学校説明(生徒6名)、２回目12/15：林業職業等説明(生徒6名)	
農業高校連携		■多くの農業高校生が、① 将来の職業として”農業”を選択し、② 農業を職業とする（就農する）ために農林大学校へ入学し、③ 農業高校３年＋農林大学校２年＝５年間を経て地域農業を担う人材として育成するための取り組みを進めた。 ■農林大学校訪問研修、高校連携講座（邇摩高校アスパラガス研修）、スマート農業研修など ■R4農業高校からの入学者18名(入学者全体の50%)　（R3：14名(45%)）	
県外就農相談会	0回	■コロナ禍により不参加（開催中止等）	
ＳＮＳ活用	農林大学校の動き：毎月 FB投稿：70件	■毎月、「農林大学校の動き」をとりまとめ、学生の活動状況・行事などを簡潔にまとめて発信。農林大ＨＰに掲載し、農業法人協会、県内全高校、各地域農業再生協議会へメール送信 ■農林大公式フェイスブックで随時農林大情報を発信70件 ■農業科では、県政テレビ番組「もっとなるほど！吉田くんのしまねゼミ」でのＰＲ等を実施。ＰＲ動画を年度内に配信予定。 ■林業科では、人気お笑いトリオ「ネルソンズ」を島根県が２代目島根林業ＰＲ大使に任命し、同トリオを起用した林業・林業科ＰＲ動画4本を8月に配信。このＰＲ動画(４本)の再生回数(R4年3月11日現在)は39万8千回。農林大林業科ＨＰへのアクセス件数も9月7,582、10月3,321と大幅に増加(7月まで月平均アクセス件数 600程度) ■農林大ＨＰのうち林業科部分の内容充実を図るため外部サイトを作成し公開(R3年12月11日)した	・ホームページ（外部サイト）で、古い学生募集の映像が流れている。発信情報のメンテナンスを。 ・SNSの活用についても、今年度も精力的に行われたと認識。林業の動画も林業就業へのモチベーションアップに繋がる内容。今後も広報を続けて欲しい。 ・林業科PR動画の効果で農林大HPのアクセスが激増しているが、R4年度林業科入学者が逆に前年より減少している。どう分析するのか。 ・農林大HPのアクセスについて、ネットとリアルの連動について考察を加えてから対策を実施すべき。（ネットでの集客にはターゲット層の選定とその誘引要因のマッチングが最も重要）

2 教育内容の充実・強化と実践力の養成

(1) 取組概要

【令和３年度学生の状況】

学年		農業科						林業科	合計
		有機	野菜	花き	果樹	肉用牛	小計		
２年課程	１年	9	9		5	9	32	16	48
	２年	5	9	3	6	4	27	8	35
１年課程	R2.10月入学		1		1		2	6	8
	R3.4月入学		1		11	2	14		14
	R3.10月入学		4		1		5	3	8
計		14	24	3	24	15	80	33	113

■農業科（２年課程）では、専攻共通・専攻専門科目の講義・演習と専攻実習、先進農林業者等体験学習、必要な資格免許取得等を行い、実践力の養成に努めた。
■林業科（２年課程）では、専門科目の講義・演習と専攻実習、先進農林業者等体験学習、必要な免許資格を取得し、就業後に即戦力として活躍できる技能の養成に努めた
■農業科短期養成コースは、令和２年度１０月入学２名、令和３年度４月入学１４名（２名が退学）、同１０月入学５名がカスタム型のカリキュラムを作成し、基礎講義、特別集中講義、専攻実習、資格免許取得、就農予定地研修等に取り組んだ。

■林業科早期養成コース６名は、林業就業に必要な免許・資格の取得、機械操作等の実習を中心としたカリキュラムを通じて基本的技能を習得し、各林業事業体へ復帰・就職した。

■研修部門は、農業科では、「特別集中講義」のみを開講し、９名が受講した。
■林業科では、林業事業体職員を対象とした林業エンジニア研修として「林業架線作業主任者講習」)を開催し、３名の受講者があった。

(2) 具体的取組状況

区分				今年度の取組状況	評価コメント（外部評価委員）
養成部門	２年課程	基礎学力		■入学前課題による新入生の基礎学力把握 ■1・2年生全員に国語、数学の基礎学力確認テスト実施 ■長期休業時に共通課題を配布 ■定期的補習の実施	・国内における産業としての農業・林業の現状と今後の見通し等を学習し、第一次産業に就業する目的・意義についての認識を確立させる必要があるのではないでしょうか。 ・基礎学力の向上や各科毎に様々な取り組みがなされ、美味しまね認証など新しいことに取り組み、それが認められることで、誇りを持って学ぶ学生の姿がうかがえた。このような取り組みを様々な形で情報発信することが、農業に取り組みたいと思う者の増加に繋がると思う。今後も積極的に情報の発信を継続してもらいたい。
		農業科	有機農業専攻	■実習では、自給肥料や育苗用土作り、機械除草、天敵やネット被覆による害虫防除技術等を用いて、水田では水稲と大豆の輪作、ハウスや露地畑では多品目野菜を栽培して販売した ■自動換気・潅水、GPSトラクターやラジコン草刈機等スマート農業機械を活用し、栽培の省力化を検討した ■サテライト校等と連携した視察や短期研修の実施、リモートでの全国レベルの有機農業研修の受講により、実践的な栽培着実や販売、経営手法を学んだ	・農業関連施策は「有機」と「スマート」が中心となります。いずれもコスト抑制がキーポイントになりますので、技術センター、ＪＡ等と連携して試験栽培等を行い、現場に情報提供するような取組みを期待します。 ・コロナ禍をチャンスと捉え資格取得やスマート農業の学習が出来る農林大学校の取り組みは素晴らしい。
			野菜専攻	■イチゴ高設栽培で美味しまね認証を取得（見込）。 ■当専攻で作ったイチゴを原料とした『イチゴオレのもと』を商品化し販売。 ■地域（市・町）農業支援センター等と連携して学生が希望する雇用就農を実現。 ■県内では極めて事例が少ないトマトの促成作型に取り組んだ結果、食味等に関して非常に高い評価を得た。 ■六次産業化と販促活動を学ぶため、洋菓子店の協力を得て野菜専攻で生産したメロンやイチゴを原材料に使ったスイーツ（リアルメロンパン、プリン等）を実習販売。 ■松江栄養調理製菓専門学校と合同研修会を開催し、実需者との交流を深めた。	・野菜専攻での実需者との交流は、果樹専攻の「売れる商品づくり」への取り組みとともに、今後の農業のあり方を探るうえで有意義であると思います。 ・技術的なコメントはできませんが、講師等の確保についてご苦労されているようですが、引き続き幅広い教育内容ができるように尽力願います。
	２年課程	農業科	花き専攻	■今年度末で花き専攻が廃止されることに伴い、管理ハウス・圃場及び学生数の減少等学習環境が厳しい中、班編制（切り花班・鉢花班）での管理から、学生全員が一つのチームで全体を管理する体制に変え、効率的な作業実習に努めた。 ■花き栽培はもちろん農業全般の基礎知識の習得・定着を図るため、専攻学生全員で日本農業技術検定（２・３級）を受験し、検定合格という目標を明確にして専攻の講義にあたった。 ■フラワー装飾技能検定３級２名、園芸装飾技能検定３級１名。	・花き専攻が廃止されたが、今後花きに興味を持つ子供たちに何かの形で学ぶ場が出来たら良いと思う。島根オリジナル品種のあじさいなど受け継いで欲しい。 ・農業科では、昨年度課題に挙げておられた六次産業化と販促活動を学ぶ実習を早速取り入れておられること、野菜や果物のブランド化と売れる商品づくりを意識した取組など、世の中のニーズに即した教育内容を意識的に行われていると感じました。 ・様々な学習の場が提供できており、充実していると思います。 ・就業後経営的に苦労される方を多く見ます。経営学習の一層の充実をお願いします。特に、労務を保管する雇用の考え方は経営を安定させる鍵になると思います。
			果樹専攻	■就農後必要となる実践技術の習得に重点を置き、ぶどうを中心とした樹種の栽培管理技術及びハウスや果樹棚等施設の修繕技術の習得を図った。 ■今年度から島根県オリジナルぶどう品種の神紅の本格出荷・販売がスタートし、栽培技術に加えて、売れる商品づくりに関する取り組み（ユニーク房、加工品開発）を開始している。 ■今年度末には、なし、すもものジョイント仕立ての実証を開始し、近年大きく変貌を遂げている果樹の仕立て技術の習得にも応えられるようほ場環境を整えている。 ■ＧＡＰの取り組みも美味しまねゴールドの実践を確実に継承、継続している。	
			肉用牛専攻	■学生に肉用牛飼育管理の基礎技術を習得させるとともに、子牛の発育成績や肥育牛の枝肉成績を分析、評価させ、飼育管理体系の改善に向けた手法をチームワークとして実践した。 ■就業に要する各種資格の取得を進め、特に、削蹄師養成講習会や家畜人工授精師養成講習会に向けた事前実習を重点的に行った ■１年次3月の三者面談を基に、学生との面談の機会を増やし、学生の希望する雇用就農・就業先での短期間のインターンシップや2年次9月の体験学習につなげている。 ■地域農業者との連携で不作付水田の有効利用として２カ所、ならびに集落内の景観保全として1カ所、牛の放牧活用を実践した。	
		林業科		■チェンソーによる伐木(受け口・追い口の適切な作り方)の基礎技術習得のため、「伐倒練習機」を使用した練習を繰り返し実施した ■高性能林業機械(ハーベスタ)の基本的操作の習熟度を高めるため、ＶＲシミュレータ(２台)を使用した反復練習を行った ■より高精度で効率的な森林現況把握手法について理解を深めるため、ＩＣＴ機材(デジタルコンパス、ドローン、地上３Ｄレーザ計測機器等)の操作やデータ処理方法を講義や実習に取り入れた ■仁多郡森林組合、飯南町及び島根森林管理署から実習森林の提供を受け、地拵え、植栽、下刈り、除伐、利用間伐(伐倒・搬出)、作業道開設の現地実習を実施した	・林業科では、例えば伐倒練習機やVRシミュレータ等の導入により、早期育成コースであっても、また、一般に林業を敬遠しがちな女性であっても、かなりの技術が身につくように教育内容が近年格段に進化しているように思うが、このことがあまり外部に認識されておらず、思いこみによる林業へのハードルが払拭しきれていないという印象を持っています。とてももったいないと思うので、ターゲットを絞った広報やPR（たとえば、「女子学生大歓迎！」的な）を取り入れてみてはどうでしょうか。

	1年課程	農業科 短期養成コース	■就農ビジョンに合わせたカスタム型のカリキュラムを作成し、基礎講義、特別集中講義、専攻実習、資格免許取得、就農予定地研修等に取り組んだ。 ■令和２年度１０月入学２名、令和３年度４月入学１２名は自身の農業経営計画を策定し、営農ビジョンを発表。県庁職員、教員、学生から就農に向けてのールを受けた。	・農業短期養成課程（１年）が本格的に稼働した中で、カリキュラムが学生たちからどのような評価を得ていたのか知りたい（満足した点、不満だった点）。この評価は、各機関で行う就農希望者確保の活動にも役立つと考えています。
		林業科 早期育成コース	■令和２年度10月入学６名、令和３年度10月入学３名(うち１名が退学) ■林業就業に必要な基礎的な知識、免許・資格の取得、機械操作等の実習を中心としたカリキュラムにより、必要な技能が修得できるよう取り組んだ。 （講義・実習の取り組み状況については２年課程と同様）	
研修部門	農業科	特別 集中講義	■農業科短期養成コース１４名、自営就農を目指す２年生８名、一般公募９名の合計３１名が受講 ■県内外のスペシャリストを講師に、「経営力入門」「マーケティング・流通」「ファイナンス・会計」「マネジメント」「農業基礎知識」「経営革新」の６部門、１６０時間の講義を実施し、農業経営者に必要な知識と技術について学んだ。 ■（株）パソナ委託事業	・特別集中講義が予定されており、定年帰農への支援としても有意義と思います。
	林業科	林業エンジニア研修	■林業事業体職員を対象とした「林業架線作業主任者講習」を開催し、３名が受講した(募集定員：５名程度)	
資格取得	農業科		■大特、けん引、フォークリフトなど農業に必要な各種資格の取得を進めた。事前練習を重点的に行った。 ■新たな取り組みとして、夏休み出張技能講習（小型移動式クレーン・玉掛け・フォークリフト・ガス溶接）を実施し、効率的な資格免許取得を進めた。	
	林業科		■林業就業に必要な資格が取得できるようカリキュラムを組んで実施。また、習熟度を高めるため、専攻実習等において伐倒練習機やハーベスタＶＲシミュレータ等を使用して、伐木技術や機械操作等の技能向上を図った	
学生指導	共通		■コロナ禍に対応するため、学生自治会とも連携し、基本的感染防止対策（①身体的距離の確保、②マスクの着用、③手洗い）の徹底はもとより、体温測定と健康観察、適切な寮・私生活の確保など感染防止対策の徹底を図った。 ■日頃から交通・生活安全の注意喚起を行ったが、交通事故２件（R２:２件）、実習中の事故７件（R２:7件）となった	・毎年申し上げていることですが、交通事故等がなかなかゼロにならないことは残念。 ・2名の退学者がいるのは残念。 ・健康相談時に「実習は楽しい」「資格は出来るだけとりたい」「早く自営就農をしたい」「経営は不安だがなんとか頑張りたい」など様々な声をきき、このような学生に対応したカリキュラムであることが分かった。
教育環境整備	農業科		■リモート講義体制整備：ＷＩＦＩ環境整備（本館２Ｆ・３Ｆ、農業研修館） ・機器整備（視聴覚室：８６型ディスプレイ等、１・２、３・４教室、有機、野菜：６５型ディスプレイ、農業研修館：８６型ディスプレイ等） ■ワゴン車：１０人乗り２台 ■ハウス整備：有機農業専攻：パイプハウス２棟（108㎡、72㎡）新設 野菜専攻：（花き4号）アスパラガス高畦栽培装置 （花き6号）長寿寿命化・養液栽培装置 ■有機専攻：：キャリアカー 1台、省力畦立て機	
	林業科		■立木伐倒実習用機材　・伐倒練習機(３) ・チェンソーＶＲシミュレータ：４台 ■実習用チェンソー保守機材　・自動目立て機(1) ■森林情報収集実習用機材　・空撮用ドローン(4)、画像解析ソフト(1)、解析用PC(1) ・森林３次元レーザ計測機(2)、計測データ処理ソフト(2) 作業道設計支援ソフト(2)、施業収支計画作成支援ソフト(2) データ処理用PC(1) ・デジタルコンパス(２)、測量データ処理携帯端末(３) 測量データ処理管理ソフト(１)、データ処理用PC(1) ポケットコンパス(2) ■学生移送用車両　・マイクロバス(１)	

3 進路指導の充実と進路意識の高揚

(1) 取組概要

【令和３年度就農・就業、就職状況】

区　分			就　農				林業就業	団体	公共機関	関連産業	他産業等	研修	合計
			自営	雇経自営	雇用	小計							
農業科	2年課程	有機農業		2	3	5							5
		野菜	1	3	2	6		1	1		1		9
		花き				0		2	1				3
		果樹	2	2	2	6							6
		肉用牛			2	2	1					1	4
		計	3	7	9	19	1	3	2		1	1	27
	短期	R2.10月入学	1	1		2							2
		R3.4月入学	12			12							12
		計	13	1		14							14
	小計		16	8	9	33	1	3	2	0	1	1	41
林業科	２年課程						8						8
	早期養成						5				1		6
	小計						13	0	0	0	1	0	14
合計			16	8	9	33	14	3	2	0	2	1	55

【近年の就農・就業状況】

年度	農業科			林業科			合計		
	学生数	就農者	就農率	学生数	就業者	就業率	学生数	就農・就業者	就農・就業率
H29	17	14	82%	8	8	100%	25	22	88%
H30	33	17	52%	7	7	100%	40	24	60%
R1	21	13	62%	9	8	89%	30	21	70%
R2	27	15	56%	11	11	100%	38	26	68%
R3	**41**	**33**	**80%**	**14**	**14**	**####**	**55**	**47**	**85%**

■農業科（２年課程）は、自営就農３名、雇用経由自営就農希望７名、雇用就農９名の１９名が就農した。
■農業科短期養成コースＲ２．１０月入学は、１名が自営就農、１名が雇用後自営就農希望。Ｒ３．4月入学の１２名は、全員が自営就農となった。
■林業科の２年課程(Ｒ２年４月入学)８名は、全員が森林組合等の林業事業体へ就職した(林業就業率・就業率とも100%)

■林業科の１年課程(Ｒ２年10月入学：早期養成コース)６名は、５名が森林組合や素材生産業等の林業事業体へ、１名が他産業に就職。林業就業率は83%となった(就業率は100%)

(2) 具体的取組状況

区分		今年度の取組状況	評価コメント（外部評価委員）
関係団体との連携による就農・就業支援	共通	■入学時、1年終了前に三者面談を実施。学生との面談を普段から実施し、学生の希望する就農・就業先での短期間インターン研修、２年生時９月の先進農林業等体験学習に繋げている。	・就農率が格段にアップした。就業率の高い林業科と共にこの状況をより多くの人に知ってもらいたい。 ・高い就業率となっており、高評価出来る。 ・進路指導における支援がしっかりと充実して取り組まれている。 ・就業先の大半が農林業が占めていることは農林大学校としての存在意義を示している。 ・短期養成コースが本格稼働し、全員が就農していることは､大変素晴らしい成果と評価出来る。 ・短期養成コースは学生も多く、即戦力として自営就農することが期待されていることがわかる。 ・農業科の就農率が高くとても良いが、今後継続できる経営を願う。 ・就農にあたり現在は各種補助金等あるが、いつまでもあるものではないため、頼りすぎることなく意識を高く持って経営に望んで欲しい。 ・近年の就農就業率がたいへん高い数値になっており、関係者の努力に敬意を表する。 ・市教育関係者（小中高の職員や市教委）とも交流や意見交換の場を設定いただきたい。また県立の教育施設を市教委としても有効に活用させていただきたい。
	農業科	■6/26就農ガイダンスを開催し、42名の学生が参加。市町村・ＪＡ・農業普及部で構成する12の地域農業再生協議会から地域の担い手の状況や支援策等について学生への説明・意見交換を実施。 ■ＪＡしまね石見銀山青年連盟視察（6/22 1年生31名）、松江地域農業発見交流会（7/22 11名学生参加）、益田市の若手プロ農家との意見交換会（7/21 10名学生参加）、浜田市農業士との交流会（8/27 6名学生参加）など、現場で活躍している農業者との交流の場が拡大。	
	林業科	■6/1、島根県林業労働力確保支援センター主催の県内林業事業体合同説明会が開催され、１年生16名、２年生６名、早期養成コース１名が参加。各事業体の業務内容等を計22社から説明を受けるなど、就職先の選定に向けた有意義な情報収集の場となった ■8/22、大田市(市長、森林組合長・農林大学校OB職員等)、美郷町(町長、町林業推進協議会代表者等)との意見交換会に それぞれ１年生13名・2年生８名が参加。各市町の林業振興対策・定住支援策等の説明と林業の若い担い手となる学生に熱いエールをいただいた ■3/18、島根県林業労働力確保支援センター主催の「森の仕事エリアガイダンス」(20事業体来場)に１年生14名、早期養成コース１名が参加。先進農林業者等体験学習の研修先や就職先選定の参考とするため情報収集を行った	
無料職業紹介事業の実施		■就職セミナーの開催（5/13 ２年生　2/17 １年生） ■本校への直接求人数74社（R2：65社） ■事業所・法人等求人意向調査情報活用（県庁・公社等との連携）	・就業先を選択するにあたっては、採用時の条件のみで判断するのではなく、ワークライフバランスの取れた明るく楽しく健全に働ける職場がどうかが大きな判断基準になることを徹底する必要がある。
インターン研修等の実施		■求人意向調査等により雇用意向のある経営体へ、雇用可否の判断とするため短期インターンシップを実施	